水上勉『雁の寺』の本文異同 : 還俗した作家として の再出発

篠田, 菜央 九州大学日本語文学会会員

https://doi.org/10.15017/4113187

出版情報:九大日文. 36, pp. 36-53, 2020-10-01. 九州大学日本語文学会

バージョン:

権利関係:

水上勉『雁の寺』の本文異同

――還俗した作家としての再出発-

篠田 菜央

一、『雁の寺』について―純文学と大衆文学の間―

いる。 でいるには一様整は本作品に触れて次のように述べてありながら私小説的な手法を用いている点が発表直後から話題ありながら私小説的な手法を用いている点が発表直後から話題る。特に直木賞を受賞した第一部の『雁の寺』は、推理小説でめて自身の参禅体験を本格的に扱ったものとして注目に値すめて自身の参禅体験を本格的に扱ったものとして注目に値すいる。

る。

本作品は、『雁の寺』『雁の村』『雁の森』『雁の

見えて来るのも必然のことなのである©。 見えて来るのも必然のことなのである©。 見えて来るのも必然のことなのである©。 と、純文学は単独で存在し得るといふ根拠が薄弱に功すると、純文学は関係ないではないかと思ふ人があるかなこと「純」文学に関係ないではないかと思ふ人があるかいすると、純文学は単独で存在し得るといふ根拠が薄弱に見えて来るのも必然のことなのである©。

家へと転身するきっかけとなった作品という評価が一般的であ家へと転身するきっかけとなった作品という評価が一般的であまうな作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学という概念が歴史的なものような作品の隆盛を受け、「純文学と、東文学」との境目が、厳格で衆文学」と私小説に代表される「純文学」との境目が、厳格で衆文学」と私小説に代表される「純文学」との境目が、厳格で来文学」との文章からは、当時の文壇にとって推理小説の属する「大文学」という評価が一般的であ

よって構成されている。それぞれの部の梗概を記しておく。よって構成されている。それぞれの部の梗概を記しておく。かれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をかれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をがれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をがれた。子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をがれた、子に餌を含ませる母親雁の絵を破り取り、寺から姿をがれた、子に餌を含ませない。

.第二部『雁の村』】 孤峯庵を出て行方不明になっていた慈念

死

の四部

慈念は故郷からも出奔する。 慈念は故郷からも出奔する。 「は、故郷の若狭へ舞い戻る。慈念な誘惑するお菊をみて、の実母お菊が村の阿弥陀堂に仮寓する。聞きつけてお菊に会いの実母お菊が村の阿弥陀堂に仮寓する。聞きつけてお菊に会いの実母お菊が村の阿弥陀堂に仮寓する。 ひかり ひょうじょ しょ ひ郷の若狭へ舞い戻る。慈念は養母と義兄弟のいる実家には、故郷の若狭へ舞い戻る。慈念は養母と義兄弟のいる実家に

実父であると聞かされる。慈念は真実を確かめるため、 で倒れて帰らぬ人となる。越雲の通夜の席で、慈念は知り合い ていたことが発覚する。宗喜は自殺し、 っていた。そんな中、 環境を耐えて暮らす。住職越雲の内妻喜代子はその様子を見守 いる父に会いに行くことを決意する。 入りした慈念は、 三部 角蔵が自分の養父ではなく、 『雁の森』】伝手をたよって再び京都の奇崇院 小僧同士のいじめや男色関係 修行僧の一人、宗喜が強姦強盗罪 お菊に慈念を産ませた 高齢の越雲はその など、 鬱 比良に を犯し 屈した 八へ小僧 衝撃

るが、 以上のように、 子を身ごもっていた。 がお菊の子であることを否定する。一方、お菊は角蔵と暮し、 そこで寺大工として働く角蔵を問いただすものの、 て放浪した末に父に殺されるまでを描いた長編小説となってい の死体は発見されなかったが、 【第四部 角蔵に突き落とされ、 『雁の死』】慈念は比良山中の観智院へ雲水入りする。 『雁の寺』は、 慈念は建設中の堂宇の上で角蔵と対決す 崖の下の池へと転落。 慈念が殺人を犯し、 雁の群れが飛び立っていった。 角蔵は慈念 実母を求め 池から慈念

> 本作品は、五回にわたる改稿・改版が行われている。そのため、各版の本文の間には異同が生じており、雑誌発表時点の本め、各版の本文では、あらすじまで大きく変更されている。 文と決定版の本文では、あらすじまで大きく変更されている。 本作品は、五回にわたる改稿・改版が行われている。そのため、右に掲げた梗概は、作者が決定版とする文庫本版の本め、各版の本文の間には異同が生じており、雑誌発表時点の本

六号、三七年一月・七八号、三月・七九号) - A稿…初出稿 『別冊文藝春秋』(昭和三六年三月・七五号、六月・七

B…第二稿『雁の寺』(文藝春秋新社、昭和三六年八月

『雁の死』(文藝春秋新社、昭和三七年七月)

C…第三稿

『雁の寺

全』(文藝春秋社、

昭和三九年四

月

D…第四稿『雁の寺 全』(文春文庫、昭和四九年一○月)

F…第六稿『水上勉全集1』(中央公論社、昭和五一年)E…第五稿『新訂雁の寺 全』(文藝春秋社、昭和五〇年九月)

C 稿の 経たD稿、 0 行本となっている。この二冊に分かれたB稿をまとめたものが 本が刊行されている。 を収めて刊行された。 稿は雑誌発表時の本文である。次のB稿すなわち初刊 『雁の寺 『雁の村』が発表された直後に、 稿 文春文庫版 『新訂雁の寺 全』である。 その後、 そのため、 『雁の寺 全气 それから十年後、 第三部・ F 稿 B稿は前後二つに分かれた単 全』が刊行された。 『水上勉全集1』が刊行 第一 第四部を収録した単行 部と第 大幅な推敲を さらにそ 部 の二編 本は、

のを除けば、A~F稿の六種類の本文が存在する。されている。つまり、『雁の寺』は、選集などに収録されたも

しい量の異同が存在する。

「おいてA~F稿の本文異同の特徴を概観しておく。文章のレベルでの異同は、A→B→C→D稿を通じて多く認められるのは、2のうち、あらすじのレベルで大幅な変更が認められるのは、2のうち、あらすじのレベルで大幅な変更が認められる。ベルでの異同は、A→B→C→D稿を通じて多く認められる。

い。」と述べている。 語句の修正にとどまっている。 改稿は、それぞれ、「十数箇所にまた手入れの不備を発見して 版」発行を機に、旧版『雁の寺』四部作は絶版することにした して、精一杯に改作完了しておきたいと思った」「この 作者はD稿のあとがきで、「私なりに、 D稿までに完了したといってよい。 E稿・F稿にかけての 削除」(第一巻・あとがき) この発言から、『雁の寺』の基本的 したものと述べており、 この作品 を四 『部作と 細かな な推敲 「文庫

本作品の意義は明らかにされていない。

二、先行研究の整理と問題設定

母恋のモチーフを指摘するものである。たとえば磯田光一は、的な手法に触れつつ、水上が他作品においても繰り返し描いた大半を占める。そしてそのほとんどが、本作品における私小説考察をしているものは、文芸評論家による印象批評的な文章が本作品に関しての先行研究はそれほど多くなく、まとまった

第一

部

雁の寺』も、

雁の寺』までの間に幾つかの推理小説作品を発表してい

推理小説作品という編集部の注文に

品を論じたものは見受けられない。そのため、この点におけるおながらに拒まれている何物か、すなわち子に餌をふくませてれながらに拒まれている何物か、すなわち子に餌をふくませている母親雁の心を奪還しようとしたのだ」。と解釈する。同じいる母親雁の心を奪還しようとしたのだ」。と解釈する。同じいる母親雁の心を奪還しようとしたのだ」。と解釈する。同じいる母親雁の心を奪還しようとしたのだ」。と解釈する。同じい。また、水上が初めて仏や僧侶を本格的に取り上げた輪じたものだと事に、水上が初めて仏や僧侶を本格的に取り上げた作品であるにもかかわらず、水上と仏教との関わりという点から本作あるにもかかわらず、水上と仏教との関わりという点から本作あるにもかかわらず、水上と仏教との関わりという点がら本作あるにもかかわらず、水上と仏教との関わりという点がとない。

ては、本作品に対する作者の自注を繰り返しているに過ぎない 寺』から『一休』への動線を述べるものであり、 た小僧の強姦強盗の挿話に、 純愛へのつながりを指摘している®。 の関係と、 のレベルの異同を論じ、 同について述べた藤井淑禎の研究である。 を指摘している点も興味深い。 こうした論考の大勢の中で注目されるのは、 水上は社会派推理小説『霧と影』(昭和三四年)で文壇に登場 後に『一休』(昭和四九年)で描かれる森女と一休の 第四部 金閣寺放火犯である林養賢の影響 しかし、論旨としては、『雁の 『雁の死』におけるお菊と角蔵 その他、 藤井は主として話筋 本作品 B稿で追加され この点につい の本 文異

おり、 されるべきである。 品の改稿には、 異同の検討の目的を、「作者のあやまちや矛盾の指摘にあるの やすい条件を負う」でと述べる。そして大衆文学における本文 いわゆる純文学とは違う位相において、本文の異同を生じさせ 本常彦は「現実との齟齬がただちに傷と化しやすい大衆文学は、 説を主軸とする大衆文学において生じる本文異同につい 理小説」という宣伝文句が打たれている。 対して書かれたものであり、 文脈を裂開し、読みの可能性を開く」ことにあるとする。 本文異同を論じるにあたってはこうした要素は当然考慮 本文の検討から、 作者の本作品に対するジャンル意識が関係して いまだ十分に読み込まれてい 紙上に発表された際は、 ミステリーや歴史小 「長編 て、 ない 推

傍線部を付した。 で、改稿によって生じた本文異同について論じる。本文 といまうに表現したのかをさぐる。 なお、本 といまうに表現したのかをさぐる。 なお、本 といまうに表現したのかをさぐる。 なお、本 といまで、作者の推敲方針を明らかにするとともに、 といる。本文 といる。本文

二、本文異同の考察①―作品の傷の解消―

たトリックを暴こうとしながら推理小説を読み進めていく。そに仕掛けられたトリックの存在である。読者は、作者の仕掛け「読者が推理小説を読む際に醍醐味の一つとなるのが、小説内

ことでもある。たとえば十返肇は以下のように述べている。る。トリックの難点については、発表当時から指摘されているのためトリックに関する記述は、A稿から大きく変更されていばべるように作品の抱える傷となる。ところが、『雁の寺』の初述べるように作品の抱える傷となる。ところが、『雁の寺』の初のため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそのため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそのため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそのため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそのため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそのため、トリックに関する記述に不審があったり、またそもそ

る。

の作品は、推理小説としては、やや設定に無理がある。この作品は、推理小説としては、やや設定に無理がある。この作品は、推理小説としては、やや設定に無理がある。

の時点では、私小説的なモチーフと純文学性が強く意識されてその後水上勉論に継承されている。しかし本作品は、雑誌発表こうした同時代評価は、基本的には書き換えられることなく、

強く意識したものである。いたのではない。むしろA稿の本文は、大衆文学誌への掲載を

周囲 踪したようにみえるのである。 は別人の遺体とともに墓に埋葬されることとなる。こうして、 寺の床下に隠しておき、翌日の夜、 待ち伏せし、深夜に帰宅してきた彼を殺害する。そして死体を 隠蔽のトリックである。 て確認しておこう。第一部において用いられているのは、 棺の中に、 0 人間には慈海が死んだことすら明らかにならず、 作品の 慈海の死体を運び入れる。その結果、 「傷」を解消するためになされ 犯行当夜、 寺で通夜経をしている別人 慈念は山門で密かに慈海を た改稿につい 慈海の死体 突然失

らB稿にかけて次のように書き換えられている。るのは、第一部の結末近くである。慈念の犯行部分は、A稿か慈念が犯人であること、また死体隠蔽のトリックが明かされ

棺に入れた。(A稿・三〇〇頁) 内陣の棺のわきにきた。白布をとった。慈念は慈海の軀を慈念は案山子を担ぐようにもちあげた。本堂にあがった。慈海の死体は筵の下で硬わばっている。ひきずってくると

廻しながら、早足で下間から裏口に出て、廊下に盤子を置めて畳に下ろした。慈念はやがて、その盤子をくるくるとのわきにあった底のまるい大盤子を抱くと、渾身の力をこやがて、慈念は棺の上に白布をかぶせた。そうして維那机

ては、犯行とは直接関係しない箇所であっても、

事実と齟

あれば傷と成り得る。

京都市内の具体的な地名が頻出する第

軀は、 すらせるとすっぽりと入った。 念はやがて死体を廻し運びながら、 び盤子をくるくるとまわしながら下間から内陣の方へ運ん ひきずりあげ、 きずってくると、 くと床下にきた。 ぐにゃッと動いて 棺のはしに硬直した頭がひっ 白布をとった。慈念は慈海の軀を力いっぱいもちあげ 慈海の死体は椀にのせられた。 お尻を空洞の盤子にのせた格好になった。 まるい盤子の上にのせた。 慈念は慈海の軀を階段をすらせて廊 慈海の 盤子の中におさまった。 死体は筵の下で (B稿・一三四頁 かけられた。 匹の鯉に似ていた。 内 陣の棺の 硬ばっている。 硬ばっ 慈念はふたた 棺の わきまでき わずか へりに ひ

A稿では、慈念が死体を「案山子を担ぐようにもちあげ」て 工の加筆によってとりあえず解消されたこととなる。 しかし、小柄な慈念が死体を遅ぶという方法が書き足される。 で、大盤子を使って死体を運ぶという方法が書き足される。 で、大盤子を使って死体を運ぶという方法が書き足される。

に雁を描いた南嶽の台詞である。に関しても齟齬が生じている。次に挙げるのは、孤峯庵の襖絵部では、物語の舞台となる孤峯庵、つまり雁の寺の場所の記述

ふえる」(A稿・二五五頁) 「わしが死んだらの、ここは雁の寺や、洛北に一つ名所が

←

ふえる」(B稿・七頁) 「わしが死んだらの、ここは雁の寺や、洛西に一つ名所が

である。中でも、 である。これらの記述から、孤峯庵は衣笠山麓にあり、金閣寺 東亜キネマの撮影所のわきから、 りにある紫野中学に通う。」「孤峯庵から等持院の裏林に出て、 道から鞍馬口に出る。千本通りを通り、北大路の大徳寺の のほど近く、 てゆくと、より詳細な地名が多く登場している。たとえば、「山 のほか、通学や檀家参りで京都市内を歩く慈念の足取りを追っ 方にある衣笠山山麓のどこかに位置していることがわかる。 うと、「衣笠山麓にある孤峯庵」と書かれている箇所がある。 ている。ところが、実際に作中で孤峯庵の位置を示す用例を拾 このことから、 A稿の南嶽の台詞では、 この場所はおよそ洛北とは言い難く、 かつ等持院のすぐ裏手あたりに位置することにな 孤峯庵は京都御所からおよそ5キロメートル西 等持院は水上が修行していた寺である。自身 孤峯庵は洛北に位置するものとされ 白梅町に出た」といった記述 洛西というのが適当 洒隣 そ

> 考えにくい。 が暮らしていた等持院の場所を、水上が洛北と勘違いするとは

時代の記憶をさかのぼっていたことを示している。時代の記憶をさかのぼっていたことを示している。場番院の地理関係の齟齬を生んだ原因を考えるにあたっては、雁の神絵のモデルが存在している。瑞春院のある相国寺は、京都御所のすぐ北、すなわち洛北に位置している。よってこの誤れば、孤峯庵の具体的な場所を等持院近くに設定しておきながら、雁の神絵といえば相国寺瑞春院であるという、作者の強烈ら、雁の神絵といえば相国寺瑞春院であるという、作者の強烈ら、雁の神絵といえば相国寺塔頭瑞春院の場所を押さえておくの寺のモデルとなった相国寺塔頭瑞春院の場所を押さえておくの寺のモデルとなった相国寺塔頭瑞春院の場所を押さえておくの寺のモデルとなった相国寺塔頭瑞春院の場所を押さえておくの寺のモデルとなった相国寺塔頭瑞春院の場所を押さえておくの寺のモデルとなった。

四、本文異同の考察②―年代設定の誤記から見えるもの―

で、考察に必要となるもののみ以下に示す。めである。紙幅の都合上、その全てを挙げることは叶わないのめである。紙幅の都合上、大量の年月日の誤記が発生しているたそれは、A稿において、大量の年月日の誤記が発生しているた年月日に関する異同は、全編に渡って至る箇所にみられる。

昭和一一年の秋の末の夕暮れである。二人の僧がこの森に年十月二十九日のことである。(A, B稿・二三八頁)堀之内慈念が、底倉の部落から姿を消したのは、昭和十三

向かって歩いている。(A, B稿・七頁)

かって歩いた。(C稿・一七一頁)昭和||二年の秋末の夕暮れである。二人の僧がこの森に向||年十月二十九日のことである。(C稿・一六六頁)||堀之内慈念が、底倉の部落から姿を消したのは、昭和十一|||堀

いる。 ぎるといえないだろうか 設定にこのような単純なミスが生じるのは、あまりに粗略に過 のである。作者は本作品を一続きの物語であると強調し、 年代に設定されてしまっている。 和一四年のことになるはずである。ところがA稿では、 ことが記述される。そのため、 終わりでは、 二部と第三部の間にかけて、時間の接続がうまくいっていない の始まりは昭和一一年とされており、 最初を抜き出したものである。 に挙げた用例は、 つづく第三部では、慈念の失踪から一年間の空白がある 部から四部 続きの物語として発表されたにもかかわらず、 慈念が底倉の部落を出るのは昭和一三年とされて まで通して読んでほしいですよ」。と述べ それぞれ第二部の結末とつづく第三部 A・B稿の第二部 第三部の物語の年代設定は、 要するに、A・B稿では、 第二部のはじまる以前の 『雁の村』の 第三部 年代 _ ح 第 昭 0

この二冊の単行本は一見すると、一つの長編小説を前後二つにすなわち二つの単行本『雁の寺』『雁の死』の出版事情である。このことに関して一つの手がかりを与えてくれるのが、B稿、

た『雁の村』を加えて完結する構想であったことがわかる。まりB稿の刊行時点では、『雁の寺』は人気に応えて発表されの村』を加えた推理長篇」という宣伝文句が打たれている。つ録した単行本『雁の寺』の帯をみると、「『雁の寺』に完結篇『雁分けて刊行したもののようにみえる。そこで、前半の二編を収分けて刊行したもののようにみえる。そこで、前半の二編を収

される(!!) とめる形で刊行された
C稿『雁の寺 踏まえると、第三部と第四部は一旦擱いた筆を再びとって書か と第四部『雁の死』は、 って生じた、第二部と第三部の間の時間の歪みは、 れた物語であったのだといえる。 失踪→父親に再会] という筋になっており、第三部 第三部と第四部の構成は、[比良にいる実父へ会いに行くため よく、特に回収しきれていない伏線も存在しない。これに対し、 てしまい、姿を消す] という筋になる。この筋だと区切りが 愛に飢えた慈念が殺人を犯して失踪→故郷で実母お菊と交わっ 加えて、本作品が第一部・第二部で完結予定であったことを 確かに第一部と第二部をひとまとまりとしてみると、 同時に構想されたものと考えられる。 予定外の執筆ということもあ (全)』において訂正 全四部 『雁の森』 、「母性 をま が

五、本文異同の考察③―純文学の志向―

る。それは、前者がはじめから推理小説として着想されているそれ以降に発表された第二~第四部の間には決定的な違いがあ以上のような執筆事情を踏まえると、第一部『雁の寺』と、

遠景化と、表現の削除による美的価値の創出という二点についる場合である。そうした方針を示す改稿として、殺人事件のがみられる。ここでいうミステリー性をはぎとろうとした形跡がみられる。ここでいうミステリー性とは、第一節で挙げた伊がみられる。ここでいうミステリー性とは、第一節で挙げた伊がなように、大衆文学性とほぼ同義である。すなわち、水上がかなように、大衆文学性とほぼ同義である。すなわち、水上がかなように、大衆文学性とほぼ同義である。そればかりか、作者が改きれたらミステリー性をはぎ取ろうとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、後者は慈念の心情を掘り下げようとして執筆されたのに対し、

表現は、 で犯行が語られることもなく、犯人には焦点化されない仕掛け になっているのである。このような作者のジャンル意識を示す 小説として発表されているためである。トリックの種明 さと不気味さが執拗に描かれている。 の慈念ではなく里子に焦点化され、 のはA稿にのみみられる記述である。 部 A稿において多く認められる。 『雁の寺』は、 トリックの説明部分を除いて、 彼女からみた慈念の これは たとえば、 『雁の寺』 以下に示す いしま が推理 不可解 主人公

て述べる

とである。(A稿・二五八頁) →**削除** 三十二の秋の末である。二人とも気づかなかっただけのこ 事件はこのときにはじまっていた。慈海が五十二、里子が

念の犯行動機についてはB稿で詳細に加筆される。小説らしい煽り文は削除される。一方この削除とは反対に、慈いてよく用いられる手法である。B稿では、このいかにも推理ための煽り文句であり、横溝正史などの伝統的な推理小説におこの一文は、事件の始まりを予告し、ミステリー性を高める

て殺人ができることを思いついた。(A稿・三〇一頁)利用して、時間さえうまくやれば葬式の棺桶に死体を詰め独な心の捨て場所のない慈念は、なじんできた寺の生活を慈念は村にいても、京都にきても、孤独なのであった。孤

死体を詰めて殺人ができるという思いつきであった。 寺の生活を利用して、 みがえるばかりである。 夢は一つであった。 っただろう。 銃をかついで京都の町々を皆のうしろから歩いた屈 きびしい教練へ 慈念は若狭の村にいても、 ただろう。中学へいってもそれはなかった。 一三六頁 孤独な心の捨て場所のない慈念は、 つらい の嫌悪であった。 それは苦しいながらも、 日課のあいまに、 時間さえうまくやれば葬式の棺桶に それでは寺の生活にどんな夢があ 京都にきても、 ま 慈念が頭にえがい どんな夢をみてき 慈念の頭に、 孤独なのであっ なじんできた あるものは、 辱がよ

稿では慈念の抱える孤独だけではなく、小柄な体のために

これに加え、慈念を狂人扱いする描写も次のように削除される。 絶望が語られる。つまり、どこにいても逃れられ 学校の教練へついていけなかった屈辱の記憶と、寺院生活への 京都での生活に対する絶望が犯行動機として加筆されている。 ない孤独と、

包丁と鎌と、 切先が光っているのをうっとりみていた。(D稿・六五頁 鋏が台の上にならべてある。西陽をうけてそ

の切先が光っている。 包丁と鎌と、鋏が台の上にならべてある。西陽をうけてそ (E稿・六三頁 孤

独な少年の狂気であった。(C稿・一一六頁) 自分の日常を苛む恩師の慈海を狙って飛びついたのは →削除

なかった。 殺人犯でしかなく、読者に彼の内面の苦悩が伝えられることは 慈念の内面が片付けられていた。そのため慈念は常軌を逸した が可能になる を示す表現が削除されることで、 稿では犯行動機が曖昧なばかりか、「狂気」という言葉で B稿においては慈念の苦しみが説明され、彼の「狂 読者の慈念への感情移入

うとするのであるが、このときの描写に関してC稿とD稿を並 べてみると、 がお菊と同棲していることを知った慈念は、 同様の改稿方針は、 両者の関係性に明確な違いがあることがわかる。 第四部 『雁の死』でも認められる。 角蔵を問い詰めよ 角蔵

> ぴりと小きざみにふるえた。<(C稿・三一六頁 を仰向けるようにほほえませた。 角蔵は瞬間、 恐怖をおぼえ、 顔面は蒼白になってぴり 猫なで声になって細い顎

猫なで声でこたえた。

手をやすめて慈念

った。それでも驅のふるえが止らない。(C稿・三一六頁) 足をじりじりとよせて、 今にも、 の方をみた。(D稿・三一二頁 と、角蔵は瞬間、 慈念はおそいかかりそうな構えにみえる。 シタミの下の角だるきを両手で握

慈念がいった。(D稿・三一二頁 の下の角だるきを両手で握ってまたしゃがみ直した。と、 慈念は必死な顔をしていた。角蔵は腰をうかして、

念に与えられた〈犯罪者〉・〈加害者〉 うな構え」の加害者として描かれる。C稿の時点では語り手は とともに、角蔵との間の 念を狂気じみた加害者として語る語り手の態度が見直され、 者という印象を読者に与えている。 明らかに角蔵の側に加担しており、 者として描かれており、対する慈念は角蔵に「おそいか え」「軀のふるえが止まらない」などと、慈念に脅かされる弱 C稿では角蔵は 「ますます声がふるえていた」「恐怖をおぼ 〈被害者―加害者〉という構図が削除 D稿への改稿によって、 角蔵=被害者、 のイメージが修正され 慈念= かりそ

も変更が生じている。 加えて、D稿にかけて、 慈念による殺人行為の内省の様子に されている。

はこの部屋にきてから、大徳寺の中学で、友人たちから教 美な刹那を思いだし、 心しようとした。里子のむっちりした乳房に顔を埋めた甘 誰も気づいていない……〉/ 慈念はそう思うことで、 激しい恐怖となって襲ってくるのだ。/〈誰も知らない。 の雁はギァギァと啼き叫んで、胸もとをつきあげるような しかし、二年前のすべてが幻じみて見えるのに、寺の襖絵 わった自瀆をはじめておぼえた。(B稿・|五八頁] 恐れから逃げようとあせった。

とで、 知らない。誰も気づいていない……〉/慈念はそう思うこ げるような激しい恐怖となって襲ってくるのだ。/〈誰も の雁はギァギァと啼き叫んでよみがえり、 しかし、二年前のすべてが幻じみて見えるのに、寺の襖絵 安心しようとした。 胸もとをつきあ

ないのであった。

(C稿・一一六頁 白煙の中で羽ばたき啼いた襖絵の雁を忘れようとつとめ けれども、 慈念の脳裡からは、 雁だけは消えたことが

いま二年前のすべてのことが幻じみて見える。 夜になると、それらのことが生々しく思いかえ 昼

> る。/〈誰も知らない。誰も気づいていない……〉/慈念 されて、 はそう思うことで、安心しようとした。(D稿・I二I頁) 胸もとをつきあげるような激しい恐怖が襲ってく

うになる。 殺人行為の回想に関わる改稿の過程を整理すると、以下のよ

子との甘美な記憶に逃避 A, B稿 …殺人の記憶と共に雁の絵がよみがえる 里

C 稿 D 稿 …夜になると犯行を思い出 …殺人の記憶と共に雁の絵がよみがえる

恐怖からの逃避場所となっているが、このイメージはC稿で捨 B稿においては、里子との過ちが「甘美な刹那」とされ、

いて殺人行為がさほど大きな意味を持たなくなっているのだと げることが放棄されていることがわかる。つまり、作品内にお A~C稿に比すると、D稿では、慈念内部の罪の意識を取り上 容が「夜になると犯行を思い出す」というものに単純化される。 であろう。最終的には、こうした削除によって、殺人の回想内 殺人行為という余計なイメージに汚されることを反省した削除 た、「子に餌を含ませる母親雁」という母性愛のシンボルが、 象され、さらにC→D稿では、雁の絵を殺人行為の象徴から救 い上げようとする改稿がなされている。これは第一部で描かれ える。ここまで、慈念の起こした殺人事件に関する表現の改

取る戦略がとられているのである。 な表現や、狂気の殺人犯とその逃避行といった要素が放棄される表現や、狂気の殺人犯とその逃避行といった要素が放棄される表現や、狂気の殺人犯とその逃避行といった要素が放棄され稿に着目した。その結果、読者に推理小説特有のスリルを与え

稿・一九七頁)であったりと、周りくどい言い回しを避けるため 稿・一九八頁)→「奇崇院がどの寺よりも変わっていたのは」 とえば、「やがて球をひねって明かりをつけた。」(C稿・一八七 を作り出すことでテクストに入り込むようにする働きをもつ。 空白箇所を積極的に作ろうとする試みであったと考えられる。 けでは説明のつかない削除も多数存在する。それは、 がどの寺よりも一風変わっていたということの一つには」(c 頁)→「球をひねった。」(D稿・一八八頁) であったり、「奇崇院 0 法の間の関係を空白のままにしておき、読者がそこに釣り合い の削除も多く含まれる。しかし、単なる文章の簡潔化というだ が、 この他、『雁の寺』全体にわたる改稿方針として注目される 読者の読書行為に焦点を当てるW. 空白箇所とは D稿における大幅な文の削除である。 この削除には、 「テクストにおけるさまざまな叙述の遠近 イーザーの受容理論によ 作品中に た

する。的価値を創出するうえで重要な役割を果たすものであると指摘

は以下のように削除・変更が加えられている。お菊が現れるという、作中でも見せ場の一つであるが、そこに念と角蔵が親子としてそれぞれの思いの丈を述べ合うところにら、慈念が角蔵へお菊との関係を問い詰める場面を挙げる。慈作者がテクスト内に空白箇所を作成した例として、第四部か

とさしこんだ月光に、お菊の白い顔が白蝋のようにうかび ようとしたが、急には閉まらない。 いて、 奥の部屋で、じっとしていたお菊の影が急に大きくゆらめ とび出しそうに大きく光ったのである。 ひっこんだ眼は爛々と輝き、 上った。慈念はあッと声をあげた。 念にみられまいと顔を伏せた。 げてくる熱い感動と、 と角蔵はうなされたようにいいつづけた。 やにわに障子があいた。 目頭ににじみ出てくる涙を角蔵は慈 憤怒と驚愕と恥辱のあまりに /と、このときであった。 **/角蔵は手をのばして閉め** 割れた部屋の中へさっ 「お父う」/慈念の (C稿・三〇八頁 胸もとにこみあ

慈念は声をのんで佇立していた。/「お父う」/慈念は急光りに、お菊の白い顔が白蝋のようにうかぶのがみえた。は手をのばして閉めようとしたが、部屋へさしこんだ月の屋にじっとしていたお菊がうごいた。障子があいた。角蔵と角蔵はうなされたようにいった。と、このとき、奥の部

出されるイメージも多種多様になる」と述べ、空所は作品の美

が多いほど、読者は想像力を駆り立てられ、そこから作り

糸口となる」『ものと説明されている。イーザーはまた、

空所は、読者がテクスト内部での均衡活動を行なう

すなわち、

する意味合いがあったものと思われる すと、 れまでの読書過程で形成していた孤独な殺人犯としての慈念の 補完に拠ることとなる。このとき読者は想像力を刺激され、 お菊に捨てられた子として育った慈念のこれまでを知る読者の なる。そのため、 のである。これがD稿で「顔を伏せる」行為へ変更され C稿のように語り手が登場人物の感情を述べるのに言葉を尽く りにとび出しそうに大きく光」る眼が描かれていた。 撃した慈念は、「あッと声を上げ」、「憤怒と驚愕と恥辱のあま といった表現が削除されている。 もとにこみあげてくる熱い感動」や「目頭ににじみ出てくる テクスト内へ没入する糸口を得る。 イメージを、哀れな捨て子へと書き換えることとなる。 成された空白箇所の存在である。 つまり、 それまで明示されていた慈念の表情は読者から見えなくな すなわち、慈念の表情は読者にとっては語られ の削除には、 の間で全く逆の表現がなされている。C稿では、 語り手が口を閉ざすことで表現に空白が生まれ、 読者はその部分についての補完の必要性を奪われてしま 場 面で特に顕 それだけテクストに没入する機会を失ってしまう こうした饒舌な語り手のもたらす弊害を修正 お菊と角蔵の同棲を目撃した慈念の内 著なの は、 登場人物の心情描写におい また、 たとえば角蔵については、「胸 作者がD稿において施した 慈念に関してはC ない空白と しかし、 お菊を目 読者は このよ 面は、 たこと て作 涙 そ

において用いた推理小説としての表現技法の多さに気付かされになる。そして何よりも、本文異同の比較からは、作者がA稿といった過程は、各稿の異同を比較することではじめて明らかミステリー性の剥奪と、空白箇所の設置による文芸性の加味

る。

してきたからこそ書けたのだ」『と述べている。この言の と影』『海の牙』『耳』『火の笛』などの書き下ろし作品で失敗 衆文学性をはぎとる推敲を重ねたのだといえる。この推敲は、 くくなっている。発表当初は間違いなく、一話完結型、 時代評価と改稿のせいで、 さ」を抱いていたことを告白し、「『雁の寺』を書けたのは 作者は本作品の成功後、「社会派といわれることへのある虚し 作家としての自意識に変化が生じている点からもうかがえる。 であったといえる。このことは、 イメージから抜け出し、 作者が自身につきまとっていた「社会派推理小説作家」という を取り巻く評価に沿うように、作者は本作品を捉えなおし、大 ーフの可能性に気づかされた可能性が高い。そして、『雁の寺 直木賞受賞によって、作者自身、 いた」と言う方が適切であった。発表後の『雁の寺』評および 小説的モチーフは本作品においては「可能性として秘められ な小僧の犯した犯罪を描く推理小説として構想されており、 本作品以後、 今日まで書き換えられることなく繰り返し参照されてきた同 推理小説は過去の失敗作として決別されることと 芸術志向の作家へ転身しようする試み 発表当初の『雁の寺』の姿が見えに 本作品発表によって、 本作品の持つ私小説的なモチ 猟奇

の歳月をかけた一大事業だったのである。 そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越なる。そしてその代わりに、『五番町夕霧楼』(昭和三七年) 『越

六、改稿による禅僧への注視

本章のはじめに確認したように、これまで『雁の寺』の主題本章のはじめに確認したように、これまでの『雁の寺』論が、第一部のみに偏りがちであったことも一因していると考えられる。加えて、雑誌掲載時の本文――では、僧侶の破戒の問題が主題とされていなかった。それは、これまでの『雁の寺』論が、第一部のみに偏りがちであったここれまでの『雁の寺』論が、第一部のみに偏りがちであったここれまでの『雁の寺』論が、第一部のみに偏りがちであったことも一因していると考えられる。加えて、雑誌掲載時の本文――とも一因していると考えられる。加えて、雑誌掲載時の本文――といった主題は、推敲の過程において前景化されたものであ成といった主題は、推敲の過程において前景化されたものであれる。

このことを明らかにするためには、前節までみてきた文章表

すると、章末に掲げたもののように整理できる([表-])。ておく必要がある。そこで改稿による挿話の入れ替わりを表に現レベルの改稿のみならず、話筋のレベルの改稿にも目を向け

用意されたにすぎないのである。 用意されたにすぎないのである。 用意されたにすぎないのである。 の役割を負っていない。禅寺は、陰惨な殺人事件の舞台として た庫裏の内情についても、作者の仏教への思想態度を示すほど た庫裏の内情についても、作者の仏教への思想態度を示すほど た庫裏の内情についても、作者の仏教への思想態度を示すほど たが深く追求 は、読み切りの予定で掲 用意されたにすぎないのである。

まっていない。

まっていない。

はは、本作品が第二部で完結する物語であったとしても同まっていない。

これは、本作品が第二部で完結する物語であったとしても同まっていない。

これは、本作品が第二部で完結する物語であったとしても同まっていない。

た喜代子が、老僧の越雲から愛人関係を強要される場面である。描写が綿密に施されている。以下は、夫を亡くして路頭に迷っに甚だしい。A稿の第三部では、梵妻の喜代子にまつわる性愛こうしたエロチシズムへの傾斜は、A稿の第三部において特

、にわかに越雲の手がのびてきた。喜代子の掌をとった。

胸もとをわけて入ってきた。喜代子の上向いた乳房は硬くびも、声を殺してもがいていた。と、越雲の手が荒々しくがしてくる。手を力強くひっぱられて抱きよせられたければも、声を殺してもがいていた。と、越雲の野が近な咽喉仏が上下に激しくうごいて、息づいた越雲の顔が近な咽喉仏が上下に激しくうごいて、息づいた越雲の顔が近があったのだ。喜代子はびくっとして手をひき、たるん力があったのだ。喜代子はびくっとして手をひき、たるん力があったのだ。

なった。(A稿・三二六頁)

られて抱きよせられた。(D稿・一九七頁)な大きな咽喉仏が激しくうごいている。手を力強くひっぱたるんだ越雲の咽喉をみつめた。枇杷の実ほどもありそうと、越雲の手がのびた。喜代子はびくっとして手をひき、

がみえる。そうして、うす灰色の半裸の肌の前を衣を着たそのまん中に、あえぎながら伏している喜代子の半裸の姿暗い茶室の中はへりの広いうす畳が敷かれてあった。いま

喜代子の声はまた泣き入るように夜の庭をつきぬけた。(Aような声がきこえるのだ。/「みんなきてくれたんか」/順らしいうしろ頭もみえた。宗育、宗光の、何かささやく四つの影がゆれ動いている。/宗温であった。/いや、宗

四九頁) → 判除

京代子の体に群がる僧侶たちの様子は、グロテスクな愛欲絵 室代子の体に群がる僧侶たちの様子は、グロテスクな愛欲絵 をで、僧侶の破戒といった問題意識は捨象されてしまっている。 として読者に強いインパクトを残す。だが、そのグロテスク で、僧侶の破戒といった問題意識は捨象されてしまっている。

行僧時代に経験したものであることが述べられている。 性の問題である。このうち、小僧同士の男色関係は、作者が修 性の問題である。つまり、B稿以降の本文で中心に語られて がるのは、鬱屈した小僧同士の関係であり、戒律に抑圧された が高の二つである。つまり、B稿以降の本文で中心に語られて がるのは、 人間関係に紙幅が割かれるようになる。加筆されているのは、 人間関係に紙幅が割かれるようになる。加筆されているのは、 人間関係に紙幅が割かれるようになる。加筆されている。

僧よりは、兄弟子から、特別扱いされる恩典も生じて、こ別な作用をもたらして、作務や、食事のさいには、他の小また、この隠微な性は、夜の行為ながら、翌日の昼に、格私は、年少のくせに、兄弟子にかわいがられて悦に入った。

[表1]『雁の寺』改稿による挿話の入れ替わり

交

三部

喜代子と僧侶の乱

喜代子と僧侶の

宗温と宗光の男 色…加筆

宗喜の強姦罪露見

と自殺…加筆

乱交→削除

二部

慈念とお菊の近

親相姦

たことがうかがえる。 小僧同 一士の男色を描く背景には、 強姦を犯して自殺する宗喜は、 作者自身の問題意識

四部

変更

なし

戒律が性 があ つ

算 れ

を内心嬉しく思う、

つまり、

子供ながらも、そういう打

が働いての性への背のびをやっていたことを偽れない。

(第一二巻・あとがき)

官能ではなく僧侶の性欲、 加されたものであった。 発表時点から主題とされていたものではなく、 を描く二つの挿話の加筆によって、 を屈折させることへの作者の批判の表れといえる。 問題へと移行してゆくこととなる。 すなわち戒律と人間の性欲の矛盾の この問題意識は、 第三部の 主題は、 改稿によって付 小僧の性欲 本作品の 喜代子の

t 悟りと母恋の融合

とお菊の近親相姦の削除につい 変されている。 える上では、 教とどのように結びつき得てい 末部でのお菊との 最後に、 本作品の主題と目されてきた母恋のモチーフが、 第 部 やり取りは、 雁の村」 A~C稿とD稿の間での、 C稿からD稿にかけて大きく改 て触れる必要がある。 るのかを述べる。 この 第二部 問題を考 慈念 仏 結

と、女の肌を教えた里子を恋うる心とに乱れて、鈴をくく呼に対する多のような情じみない。これで表れまでもの
は眼をつぶって足をうごかした。(С稿・一六五頁)
ひろげた。/「こっちへおいでんか。いややなァ」/お菊
つに割れた。お菊は手をうしろにつかえて、無様に太股を
ちを凝視していた。赤いネルの腰巻が、やがて蔭の中で二
お菊の白い顔は媚びをふくんだ細目を糸のようにしてこっ

D				慈念とお菊の近親 相姦→削除				
と、女の肌を教えた里子を恋うる心とに乱れて、鈴をくく	肉に対する炎のような憎しみがいま、母性を恋い慕うもの	慈念の心の中で、父なし子を産んで自分を捨て去った女の	は眼をつぶって足をうごかした。(C稿・一六五頁)	ひろげた。/「こっちへおいでんか。いややなァ」/お菊	つに割れた。お菊は手をうしろにつかえて、無様に太股を	ちを凝視していた。赤いネルの腰巻が、やがて蔭の中で二	お菊の白い顔は媚びをふくんだ細目を糸のようにしてこっ	

一部

変更

なし

稿

Α

В

C

って、たかぶる本能にわれとわが身をまかせた。(c稿・一った紅白の布紐のようにないあわさった。慈念は眼をつぶっ

六五頁) ※傍線部が左記に変更

にいた。 念は息を呑んだ。慈念は堂の外へ走り出ていた。(D稿・一ように匂う軀を仰向けて、男を誘う顔は異様であった。慈た。これが母だろうか。母であるものか。眼の前で蒸れる慈念はいま、自分の母だといわれる盲目の女の顔をみてい

る。 C稿において描かれているのは、お菊の媚態である。 C稿で といった本能をお菊にぶつけ、結果お菊と関係を結ぶこととな が描写されており、彼女は慈念を誘う妖し で美しい女として表現される。そのお菊に対し、慈念は「憎し な美しい女として表現される。そのお菊に対し、慈念は「憎し な美しい女として表現される。そのお菊に対し、慈念は「憎し な美しい質」「豊満な胸 はこの他の箇所でも、お菊の「鼻の高い美しい顔」「豊満な胸 はこの他の箇所でも、お菊の「鼻の高い美しい顔」「豊満な胸

る。

ということは、 を意味している とを否定するものである。 れた慈念のこの心情描写は、 お菊に対峙して「これが母だろうか。母であるものか」と自問 D 稿ではこの お菊の前から去ってしまう。D稿において追加さ 慈念の内部に理想の母の像が存在していること 近 親 相姦の描写が削除され、 そして、 目前のお菊が自分の母親であるこ 慈念がこの自問自答をなす 代わりに、 慈念は

> 永遠に幻でしかあり得ない。そのため、 汚れたお菊が慈念の実母である以上、この清らかな母の像は 部に発現する母の像は、 る。この汚れたお菊の登場により、自問自答を通して慈念の内 って慈念の悟りを得る旅という枠組みも強調されるようにな 景化される過程が指摘できる。そしてこれとともに、 関する改稿には、作品の枠組みとして慈念の母親探しの旅 の母を追い求めることとなる。このように、第二部でのお菊に 注目すべきはC稿で描写されていた美しいお菊との対照性であ たような汗と埃の臭気。」(一六六頁)といった描写が加筆される。 むら白粉が襟にべったりついた真紅の襦袢。ぷーんと匂うすえ 更にE稿では、これに、「よごれた口もと。 清らかな理想像へと昇華する。 慈念は存在しな ざんばらの髪。 改稿によ が前 ·理想

禅宗に特徴的な見性成仏の考え方が示されている。つまり本作品においては、「悟り」は自分を知ること、つまりった人を知ってはりますか」(F稿・二三八頁)と反駁している。らは一生自分がわからんわな。和尚さんは自分を産んでくれはと説明されている。慈念はこの説明に対し、「和尚さん、わしと説明されでは、「悟り」は、竺道によって「自分を知ること」本作品では、「悟り」は、竺道によって「自分を知ること」

生まれている。作者は、自身の出家を以下のように振り返ってなものだといえる。この仏教観は、作者自身の出家の経験からとは親子関係を確認することだとする仏教観は、水上に特徴的門に入ることを意味している。にもかかわらず、悟りを得ることころで一般的な定義としては、出家は親子の縁を切って仏

であった。」(『わが六道の闇夜』十三巻・三〇六頁) であった。」(『わが六道の闇夜』十三巻・三〇六頁) は家することは家を捨てることである。十一歳の得度式の際に、私は山盛松庵師から、とである。十一歳の得度式の際に、私は山盛松庵師から、とである。十一歳の得度式の際に、私は山盛松庵師から、とであった。」(『わが六道の闇夜』十三巻・三〇六頁)

あった。 しの旅と仏道修行の旅は、作者にとって容易に結びつくもので『雁の寺』で慈念が述べる修行観として語られている。母親探に抱いて暮らすものであったという。こうした作者の感慨が、水上にとって、寺での修行の日々は、別れ際の母の記憶を心

て設定しなおそうとする意図が表れている。 されるものである。 を示唆している。この台詞はA稿には見られず、B稿にて加筆 の道をまじめに積んでおればいつかは会える……慈念」と声 親に会っていないと言う慈念に対し、「いつかは会える。 枠組みを強調する加筆がなされている。たとえば、竺道は、 A稿からB稿にかけては、慈念の悟りを得る修行の旅とい 竺道は、ここで慈念の修業の道の果てに、親との邂逅 現実には永遠に邂逅することのない存在であり B稿において、 慈念を修業中の仏弟子とし しかし慈念にとっ 修行 を う 両

のモチーフを作品に取り込んでいたといえる。 内部に発現する理想としての母像でしかなかった。 従って慈念の修行の物語であった。 加えて、伽藍の中での抑圧されたない慈念の悲哀が漂う。 水上が『雁の寺』で描いたのは、小僧であった。 その意味で、『雁の寺』全編には救済されることは不可能ぶように、いくら修行を積めども彼が悟りを得ることは不可能ぶように、いくら修行を積めども彼が悟りを得ることは不可能が「わしは今日まで禅宗のお寺で修行をつまされてきたけれど、内部に発現する理想としての母像でしかなかった。従って慈念のモチーフを作品に取り込んでいたといえる。

八、還俗した作家という自画像

ってよい。水上は一三年間にわたる執筆活動の中で、自身の文 「還俗した小説家・水上勉」へと書き換える作業であったとい

学の主題として「仏教」を再発見したのである。

【注記】

- 性に傾きがちな作品を指すものと考えられる。 ムード音楽の流行になぞらえて言われるようになった概念であり、 抒情
- 2 伊藤整「「純」文学は存在し得るか」(『群像』昭和三六年一一月号)。
- 4 3 日。 平野謙「「群像」十五周年によせて」(『朝日新聞』昭和三六年九月一三 新潮文庫版『雁の寺・越前竹人形』
- 版では、「雁の寺」は第一部しか収録されていない。 (昭和四四年三月) 解説。新潮文庫
- 5 六月所収)。 野口富士男 「北陸の風土と水上勉」(『作家の椅子』作品社、 昭和五六年

- 6 文』二二号、昭和五七年一〇月): 藤井淑禎『『雁の寺の構図』―〈一休〉への道程―」(『東海学園国語国
- (『松本清張を読む』笠間書院、平成二一年一〇月)。 松本常彦「大衆文学における本文研究―「時間の習俗」を例にして―」

7

9 8 インタビュー「水上勉の周囲」(『別冊宝石』一一四号、昭和三七年一二 十返肇「直木賞の水上勉」(「週刊読書人」昭和三六年七月二四日)。

月。

- 10 しかし、その訂正も完全なものではなく、 作品内の年代設定の矛盾が解
- 消されるのは全集版をまたねばならない
- 11 年五月)。 イーザー著『行為としての読書』(轡田收訳、岩波書店、 一九九八
- 「社会派のレッテル」(『朝日新聞』昭和三七年五月一〇日)。

12

(本会会員)